



文学部だより 第21号

『文学部だより』編集委員会

(Citation)

文学部だより, 21:1-8

(Issue Date)

2023-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489519>





非接触から接触へ

文学部長・人文学研究科長 長坂 一郎

2023年5月8日に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類感染症に変更されたことに伴い、神戸大学の活動制限指針の全項目をレベル0、すなわち「通常通り」へと引き下げました。2020年4月から始まった活動制限が、3年ぶりに全面的に解除されたこととなります。もちろん、これによってすぐさま新型コロナウイルスの脅威が去ったとはいえませんが、制限なく教育研究活動が行える環境を取り戻したという点においては、非常に喜ばしいことだと思います。

これにより、一部を除いてほとんどの授業が対面に戻りました。また、クラブ活動なども通常と同じ形式で行われているようです。マスクについては、学生も教員も自らの判断で着用するかどうかを決めることになっており、現在のところ、だいたい2/3の学生がマスクをして授業を受けている状況です。ただ、まだまだ新型コロナウイルスの感染がおさまったとは言えない状況が続いていますので、しばらくの間は「コロナと付き合っていく」という姿勢が求められるのでしょうか。

コロナ禍の最中は、どこにいてもとにかく非接触が求められました。最初のうちはすべての授業は遠隔で行うこととなり、それがハイブリッドへと移行し、そして、そのあと対面授業となった時でも隣同士の座席は1メートル以上離すようにとされました。人と会っても握手はせず、顔を覆うマスクによってダイレクトには顔を認識できない状況に置かれました。

研究活動においても非接触は徹底されました。対面の実験は禁止され、インターネット上での調査が主流となり、成果を発表する学会もオンラインとなりました。研究者間の交流も非接触で行われ、学会の委員会などで東京に出張することもなくなりました。これらの状況は、現在も部分的に続いています。

こうした非接触の状況においては、何か大切なものが失われていたような気がします。それが何であるか明確な言葉にすることはできませんが、非接触の状況が接触へと変わり始める、この「何か」を取り戻す過程でそれが明らかになっていくのではないのでしょうか。

まず、はっきりと分かることは学生の表情が明るくなってきたということです。もちろん、それは人と直に交わることによるものだけではないでしょう。しかし、非接触の状態のままでは生じなかった変化だといえると思います。今年の4月には、文窓会主催の新入生歓迎会を開催しました。新入生たちはほぼ全員参加し、自分の興味のある分野の教員たちと直に「接触」しつつ、質問や意見をぶつけていました。こうしたことは4年ぶりです。オンライン開催の時には質問もなくあっけなく終わってしまった歓迎会も、この日は予定の時間を1時間以上オーバーしてもまだ会場に残って話し続けている学生と教員の姿がありました。これも、「接触」がもたらす一つの効果なのでしょう。

文窓会の皆様には、日頃からご支援を賜り、大変感謝しております。新型コロナウイルスの影響から回復しつつある学生たちに、これからも温かいご支援やご協力をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

CONTENTS

研究科長 挨拶	1
研究最前線	2-3
最近の著作から	4-6
報告	6-8
近況	8



現実の人のあり方から道徳を考える

安倍里美 講師

専門はメタ理学、生命倫理学。主な業績として、『3STEP シリーズ倫理学』（第13章「理由—「道徳性」ではなく「規範性」から出発する」担当、昭和堂、2023年）、「義務の規範性と理由の規範性—J. ラズの排除的理由と義務についての議論の検討—」（『イギリス哲学研究』第42号、2019年）など。

道徳とは何かという問いに、哲学者たちはこれまでいくつもの答えを用意してきました。理性の呼び声こそが私たちに特別な要求を課すのだとした思想家もいれば、非難や賞賛といった実践は実のところ完全なフィクションに基づくものにすぎないと論じた思想家もいます。いずれにせよ、人を導き、縛る道徳というものを説明しようとするのなら、私たちが自分や他者の行いをどのように理解し、どのように心を動かすのか、どのように道徳を気にかけるのかについて反省してみる必要があります。これは、単純に自分自身の経験を振り返って自分の目に映る道徳を描くことではなく、様々な状況に置かれた人々のあり方を、理論の一貫性のために歪曲することがないようにしながらも、しかしあくまで整合的に説明する試みです。

これはなかなかどうして簡単な作業ではありません。たとえば、「私にいま何ができるか」という真摯な問いを持ち続け、自分にできる最善を尽くす。そういうものが誠実な生き方なの

だと言われることがあります。このように考えるとき、私たちは、道徳をこれからすべきことについての呼びかけ、未来に方向づけられたものとしてイメージしているようです。しかしながら、「いま私に選択可能なこと」は途方もない広がりを持っているわけですから、そのうちどれかを選び取って「自分にできることをやる」人はある種の賭けに身を投げ続けているのだとも言えそうです。それでも、一度は切り捨てたものの重要性や、自分の行いが予想もつかない悪い結果を招いたことに心のどこかで囚われ続けるのは、その誠実さ故と考えたくなります。変えられない過去に気を取られてしまう人の在り方を支えているのもまた道徳なのです。前へ後ろへと私たちを引っ張る道徳の広がり突き止め、どの部分もおろそかにせず語るのは骨の折れる課題です。しかし、それは私たち自身の存在を理解していくことにも繋がっているように思います。



真夜中の文学部の中庭において琵琶を奏でる音色が聞こえたら

早川太基 講師

専門は「詩」を中心とした中国古典文学・音楽・文人文化。主な業績として『琵琶曲「啄木」—宋代文人の聴いた音楽—』（『東方学』第136輯、2018年）、「北宋文学における啄木鳥—寄託の深層化—」（『日本中国學會報』第72集、2020年）など。

真夜中の文学部の中庭において琵琶を奏でる音色が聞こえたら、それは僕が美しき月明かりのもと、落花の雪のなかに少年の春を惜しみながら、四つの緒にむけて黄楊の撥を振り下ろしているのかもしれない。琵琶の胴体である「槽」は、正倉院御物と同じく紫檀のものを、職人に特注して造ってもらっている。つまりは1000年以上前に、東アジア各地で奏でられていたものと同じく、真珠を玉盤に落とすがごとく清亮なる響きを放つ。

目の前のテーブルには、禁中の奥深くに秘蔵される平安朝の琵琶譜の複製が、置かれている。

全神経を研ぎすませながら、古譜から紡ぎだせる旋律に耳を傾け、そして歌詞として伝わる漢詩を、あてはめながら歌ってゆくと、1000年以上前の歌曲がよみがえる。

自分の心に聴こえてきた音楽や、詩歌の言葉のなかの情感は、時には驚くほどに新鮮であり、生なましいほどに感動的ですらある。この震えるような感触の根源を探りだそうというのが、僕の「詩」や「音楽」や「文人文化」などの研究にむけ

ての原動力である。

人の生きた軌跡など脆弱であり、ほっておくと自然と歴史の淵のなかに沈みこむ。いにしえの人々がどのような感情を抱いていたかは、今では濃霧のかなたの街を見わたすようにしか捉えられない。しかし古譜や漢詩に秘められた世界を、丁寧に読み解いてゆくと、その霧がきれいに晴れわたり、そこに住まう人々の顔があらわれ、やがては対話を始めることも可能になるかもしれない。

このような人文学を研究してゆく道すじのうえでは、時空のなかには文学や音楽によって表現されている感情が、最高級に凝縮されている一点が、いくつもあるのに気づく。それらを丹念に見つけだして全体的な構造をさぐり、表現の仕方を分析してゆくと、時としては我が身の感性につながる体系のなかに、うまく位置づけられることもある。

今夜もまた研究のために、嘈嘈切切として琵琶を奏で、朗朗と詩を歌おう。



小説を通して時間と向き合う

平川 和 助教

専門は、現代アメリカ文学。主な業績として、「砂漠化する文体、滲み出るリリズム —Don DeLillo, *Point Omega* における「静けさ」の詩学」(『神戸英米論叢』36号)、“*Falling Man without Organs: Don DeLillo’s Poetics of Slow Motion*” (日本アメリカ文学会関西支部第5回奨励賞受賞論文) など。

ドン・デリーロという作家を中心に現代アメリカ文学を研究しています。特に、小説の中の時間表象に興味関心があります。人間が生きていくうえで「時間」という概念は非常に重要です。というか、この概念から人間は逃れることはできません。時間について問うことは、「人間とは何か?」を問うことに等しいでしょう。普通私たちは、過去・現在・未来という直線的な時間の流れを生きていると思うでしょう。10年前の自分と今の自分は、あらゆる点で違いますよね。例えば、細胞は日々新陳代謝を繰り返すので、私たちの身体は10年で全く違うものになります。また、10年間で得た経験によって、私たちのものの考え方(精神面や価値観)は少なからず変わっていくはずですが、しかし、それでも10年前の自分と今の自分が「同じ」自分であると認識できるのは、時間が連続的・直線的に流れている

という認識のもとに私たちが生きているからです。このように、時間の捉え方は私たちの自己認識(アイデンティティ)に深く影響します。

しかし、小説は必ずしも直線的な時間の流ればかりを描くとは限りません。小説では、未来の視点から過去を描いたり、タイムスリップで過去・現在・未来を自由に行き来したりできます。あるいは、10年間の出来事を1ページで描いたり、数秒の出来事を数十ページにわたって描いたり、小説は時間を自由自在に操れるのです。それによって、通常の時間の流れでは見落としがちな人間の別の姿が見えてくることがあります。小説を読むことで直線的な時間の流れから自分を解放し、自分でも気づいていない「別の」自分に出会ってみたいのではないでしょうか。



社会運動史研究と記録保存

吉川 圭太 講師

専門は日本近現代史、地域歴史資料学。主な業績として、「震災資料と震災展示」(『歴史評論』865、2022年)、『阪神・淡路大震災を撮る』(責任編集、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、2019年)、「一九二〇年代の社会運動と在野法曹」(『部落問題研究』209、2014年) など。

2021年10月に講師として着任しました。専門は日本近現代史、とくに戦前日本の社会運動史を研究しています。戦前の社会運動史と聞いてイメージされるのは、労働運動や農民運動、社会主義運動などかと思いますが、私の研究では第一次世界大戦以降に本格化するそれらの諸運動に積極的に関与した在野法曹(弁護士)の思想・行動に着目し、その検討を通して近代の社会運動を人権・社会的権利をめぐる権利運動として捉え直していくことを課題としています。

戦前社会運動の一つの特質は、団結権・ストライキ権が法認されていなかったこともあり、争議行為が刑事罰に問われたり、民事提訴されたりなど、運動が裁判を抱え込まざるを得なかった点にあります。しかし従来の研究では個々の争議分析が中心だったため、争議「後」の裁判までを含めたかたちで人々の運動経験や多様な社会関係が十分検討されてこなかったと言えます。人権保障が制度的に脆弱で社会権が未確立だった戦

前の法体制のもと、法と社会を媒介する位置にある在野法曹らが、人々の要求をいかに汲み上げて対抗的法理論を形成し、法廷内外で実践したのか、またそのことが当時の人々の法意識にいかなる影響を与えたのかについて今後も継続して探求していきたいと考えています。

もう一つ、同時に進めているのが地域歴史資料学研究(現代資料論)です。とくに阪神・淡路大震災などの自然災害、高度成長期以降の住民運動の記録資料の保存・活用に取り組んでいます。これらの記録資料は、当時社会で起きた事象を複数の視点から検証し、現在と将来に向けて対話を開いていく基盤となるものですが、関係者の高齢化が進み、それらを社会的にいかに引き継いでいくかが課題となっています。記録保存活動を進めるとともに、それらの資料分析やオーラル・ヒストリーを通して、災害や市民運動を現代史に位置づけていくことが今後の研究課題です。

森田義之・越川倫明・甲斐教行・宮下規久朗・高梨光正監修『ヴァザーリ 美術家列伝』全6巻
中央公論美術出版 2022年12月

16世紀イタリアの画家・建築家で「美術史家の父」ヴァザーリによる西洋美術史の最重要著作の全訳がようやく完結。従来「ヴァザーリの全訳がない先進国は日本だけ」と言われ、戦前から3度も試みられたが抄訳で止まっていた。今回はハーヴァード大学イタリア・ルネサンス研究センターなどの助成を受け、十年がかりで、専門家の多くを結集し、最新の研究成果を詳細な註と解題に記し、現存作品を可能な限り図版で掲載し、欧米諸国にもない情報量に富んだ完全版となった。(宮下規久朗)



周藤芳幸編『古代地中海世界と文化的記憶』
山川出版社 2022年7月

共同体の過去の記憶はいかに想起、保存、再生されて共同体のアイデンティティ形成に関与したのか。本書はこうした問いを核として、古代地中海世界(エジプト、ギリシア、フェニキア、ローマ)の歴史研究者が各々専門の立場から独自の論点で切り込んだ論集である。佐藤は第8章「古典期アテナイにおける喧騒の記憶とその共有」で、過去の野次、騒ぎがどのような場でいかに語られるのか、場に応じた語りの作法が共同体の記憶形成に影響することを論じた。(佐藤昇)



著・訳 ションコイ ガーボル・奥村弘・根本峻瑠・市原晋平・加藤明恵『ヨーロッパ文化遺産研究の最前線』
神戸大学出版会 2023年3月

ガーボル・ションコイ、タニヤ・ヴァフティカリ執筆の欧州委員会報告書 *Innovation in Cultural Heritage Research* の日本語版、およびその内容理解をより深めるための諸論考、ションコイ氏との欧州や日本の文化遺産に関する座談会の記録をまとめた一冊。ヨーロッパにおける文化遺産研究の歴史・現状や課題を検討し、歴史理論研究に基づき体系的に整理した報告書です。ここで提起される諸課題は、日本における文化遺産の保全・継承活動時のそれとも共通する側面があると考えます。(加藤明恵)



Ochiai Emiko and Hirai Shoko eds., *Japanizing Japanese Families: Regional Diversity and the Emergence of a National Family Model through the Eyes of Historical Demography*. Brill. 2023年3月

『日本家族の日本化——歴史人口学から見る地域的多様性と日本型家族モデルの誕生』と題する本書は、明治維新という政治的区切りではなく、家族や人口を基盤とする社会構造の変化から近代化を捉え直した一冊です。近世末に地域性が縮減し、比較的均質な日本型家族(家)が全国的に広がったことを軸に、新たな日本社会論を打ち出しました。写真や図表を多く掲載し、読みやすさも追求しています。(平井晶子)



平井晶子・中島満大・中里英樹・森本一彦・落合恵美子編『くわたり>から始まる社会学——家族とジェンダーから歴史、そして世界へ』
有斐閣 2023年3月

自分の中の「なんで？」から始めて、その問いに潜む社会の構造を考えた論文が14本並び、ユニークな論文集です。個人的なことが社会的なことにつながる、その醍醐味、面白みをぜひ味わってください。「くわたり」の沖縄社会学」や「アジア家族の多様性に迫る」といったコラムもあります。「何でもできる」といわれている社会学の可能性やアプローチの妙味をあらためて楽しんでください。(平井晶子)



Xinren Chen and Doreen Dongying Wu (eds.), *East Asian Pragmatics: Commonalities and Variations*. Routledge. 2022年8月

本書は、東アジアの3つの言語(中国語、日本語、韓国語)を対象としたこれまでの語用論研究の成果を包括的にまとめている。トピックは、発話行為、ディクシス、談話マーカ、会話分析、ポライトネス等多岐にわたり、様々な角度からこれまでの研究、アプローチが議論されている。また本書の後半では、言語間の比較についても論じられている。本書は使用レベルにおける言語の個別性と普遍性を考える上で有益な一冊となるであろう。(澤田治)



劉慈欣ほか著、王德威ほか編、小笠原淳ほか訳『華語文学の新しい風』
白水社 2022年10月

「サイノフォン(華語)」とは、諸方言も含めた中国語のこと。中国国内を含めた世界各地の華人コミュニティにおいて、多元的、流動的、混成的に用いられる言語系概念です。本書はその豊かな広がりを紹介するアンソロジー。香港の高層ビルからチベットの高原湖まで、シカゴのバーからマレーシアの原生林まで、多様なジャンルで世界を切り取る17篇を集めています。濱田は編集、解説のほか5篇の翻訳を担当しました。(濱田麻矢)



野田麻美・静岡県立美術館編『頼川図と蘭亭曲水図—イメージとテキストの交響』
勉誠社 2023年5月

東アジアにおける文学・書・画の世界を考えるうえで、とりわけ重厚な二つの画題・「頼川図」と「蘭亭曲水図」に注目した論集。文人画の祖とされる王維、書聖として崇められる王羲之にまつわる故事を絵画化するなかで、園林を舞台とする文人たちの交流はいかにして描かれ、その風景表現はどのように展開したのかという問題をめぐって、諸分野の第一線の研究者による論考とカラー図版を含む120点超の書画資料によって、中国と日本、そして、宋代から近代に至るまでの王維・王羲之イメージを精査・検討した。(野田麻美)



姜尚中監修『アジア人物史』(全12巻+索引巻)
集英社

第7巻「近世の帝国の繁栄とヨーロッパ」(2022年12月)、第2巻「世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア」(2023年2月)
集英社の創業95周年企画として刊行中の伝記シリーズ。「交流」をキーワードに、古代から21世紀までのアジア(日本・朝鮮半島・中国・東南アジア・南アジア・中央アジア・西アジア)の歴史を、総勢1万人の登場人物を通して一望する。東洋史専修からは真下が第7巻第4章「ムガル帝国の栄光:アクバルからアウラングゼーブへ」、村井が第2巻第5章「王朝の興亡と皇后の運命:隋唐革命」を担当。また緒形も第11巻第6章「自由主義の開拓者、胡適と陳寅恪の生涯」を担当予定。(村井恭子)



日本孫文研究会・神戸華僑華人研究会編『東アジア世界と共和の創生:辛亥革命110周年記念国際学術シンポジウム論文集』(孫中山記念会研究叢書VIII)
汲古書院 2023年3月

20世紀初頭の中国で最初に生まれた共和国の歩みは荊に満ちたものであり、それから100年以上が経過した現在においても、それが打倒の対象とした封建専制という頑強な地盤を突き崩すことができていない。本書は、2021年11月に行われた国際学術シンポジウムを基に、辛亥革命後の10年を視点とし、政治、思想、華僑華人研究の最新の研究成果を提供する論文集である。(緒形康)



黄俊傑編『儒家思想と21世紀的対話』(台湾大学人文社会高等研究院東亜儒学研究中心・東亜儒学研究叢書32)
国立台湾大学出版中心 2022年10月

中華教育文化基金会プロジェクト「儒家思想的21世紀新意義」の第1年度研究成果報告論文集。13の研究テーマを14人の台湾・大陸・日本の研究者が論ずる。第1部「儒家思想と21世紀」には8本の論文を収め、朝鮮、日本、ベトナムを含めた儒家思想の核心的内容と21世紀における新たな意味付けを探索。第2部「儒家思想と現代の挑戦」には5本を収め、現代的課題に直面した儒家思想の多様な姿を描く。(緒形康)



林遠沢主編『危疑時代的儒学思考』(華文化主体性研究叢書)
政大出版社(国立政治大学) 2022年12月

本書は「グローバリゼーションの挑戦下における現代儒学思想」と「中国と東アジアにおける伝統儒学思想」の2部に分かれる。全13編の論文は、過去のさまざまな「危疑」の時代における儒学の理論的対応を振り返りながら、新型コロナウイルスやAIに代表されるグローバリゼーション下で、市民意識を備えた礼治共同体の構築を目指す中日韓の試みに対する論評と考察に当てられる。(緒形康)



マーク・フィッシャー著、大橋完太郎訳『ポスト資本主義の欲望』
左右社 2022年8月

「資本主義の終わりより世界の終わりを想像する方がたやすい」という文句で知られる『資本主義リアリズム』の著者マーク・フィッシャーによる生前最後の講義を書籍化したもの。志半ばで自ら命を絶ったフィッシャーだが、死の直前までおこなっていたこの講義録には、資本主義社会の発展と閉塞を文化として読み解く術と、それを乗り越えるためのアイディアが手つかずのまま残っている。(大橋完太郎)



ニック・スルネック著、大橋完太郎監訳『プラットフォーム資本主義』
人文書院 2022年11月

AmazonやUberなど、今日の消費社会で猛威を振るう「プラットフォーム型」ビジネスは、いつごろどういう経緯で誕生したのだろうか。産業形態の展開や労働市場の構造の分析を中心に、北米の産業史を丁寧にたどる本書は、現在の日本でも浸透しつつあるプラットフォーム・ビジネス(タクシーの「GO」などがその典型だが)の仕組みを平易に解明してくれる。(大橋完太郎)



神戸大学人文学研究科編『人文学を解き放つ』

神戸大学総合出版センター 2023年3月(編集代表:樋口大祐・濱田麻矢)

2020年代の世界における「人文学」のミッションをめぐる、神戸大学人文学研究科にゆかりのある38名の研究者のメッセージを集めた。2019年10月から2021年9月にかけての二年間、神戸新聞文化欄に毎月一回連載したリレー・エッセイが出发点である。各研究者の個人としての研究活動にフォーカスするため、講座・専修・教育研究分野等に関わらず、個々人の研究の特徴を示す8つのカテゴリーにわけて章立て・配列している。

第1章「コンフリクトを追跡する」(執筆者は佐々木祐、吉川圭太、藤澤潤、市原晋平、若狭優)では、現在の世界に存在する大きな社会的コンフリクト(移民・難民、戦争、原発、SNS空間における中傷行為等)についてのエッセイを集めた。第2章「『雰囲気』を探究する」(久山雄甫、大橋完太郎、安倍里美)では、人間と人間を取り巻く環境との身体的交感に関する根源的な問題系について執筆いただいた。第3章「『ことば』を深掘りする」(古市晃、石山裕慈、伊藤隆郎、田中真一、澤田治)では、人文学の不可欠の基盤をなす「ことば」そのものをテーマとした。第4章「『ことば』と社会をつなぐ」(佐藤昇、中畑寛之、白鳥義彦、南コニー、酒井朋子、梶尾文武)は、「ことば」と現実が交差する場で起こる諸現象について書いていただいた。

第5章「ジェンダーを解きほぐす」(平井晶子、奥村沙矢香、濱田麻矢、中真生)は、近年の人文学に根源的なパラダイム転換をもたらしているジェンダー研究に関わるエッセイを集めた。第6章「古典を読みかえる」(茶谷直人、早川太基、宮下規久朗、芦津かおり、斎藤公太)では、「古典」的なテクストを読みかえることの効果や意義をテーマとした。第7章「流動／変化をつかまえる」(有澤知世、小寺里枝、原口剛、樋口大祐、菊地真、平川和)では、存在の多様性や流動性に関わる文章を集めた。第8章「『こころ』を放つ」(梅村麦生、野口泰基、柳澤邦昭、新川拓哉)では、認知科学的な手法を取り入れた諸研究について紹介した。

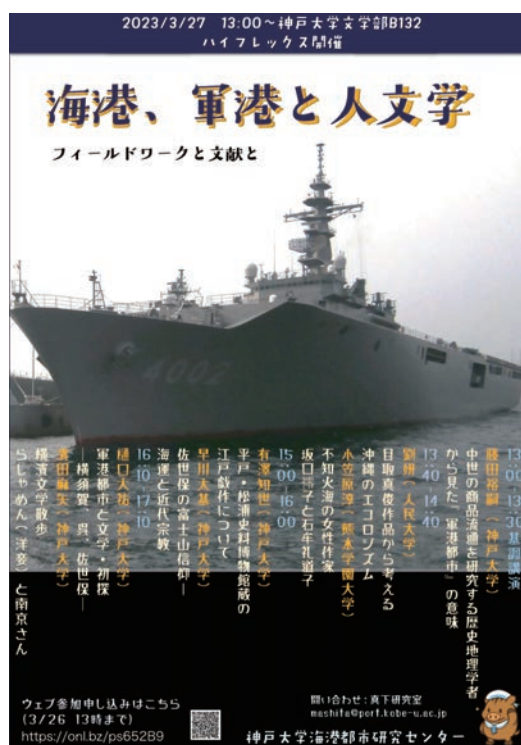
大学受験を控えて進路について迷っている高校生、人文学に関心のある社会人や大学生に向けて、人文学の多様性、愉しさ、意義等について考えるきっかけとなることを目指して編集・刊行した。(樋口大祐)



シンポジウム「海港、軍港と人文学：フィールドワークと文献と」

真下 裕之

海港都市研究センターはこれまで東アジアの研究機関と連携し、海港都市の文化や社会、歴史について、専門分野の枠組みを越える横断的な研究を試みてきました。2022年度には、多分野をまたぐ研究の切り口として軍港に焦点を絞り、研究の初動として、実地(フィールド)調査や文献調査を重ねてきました。そうした調査の結果を持ち寄り、センター外、国外の研究者の参加も得て、総合的な知見を深めるために開催したシンポジウムが「海港、軍港と人文学：フィールドワークと文献と」(2023年3月27日、対面・オンライン、ハイブリッド開催)です。7名の研究者が充実した調査報告を行い、活発な議論が交わされました。なお、軍港からみる海港都市研究をさらに進めるため、当センターは2023年度、神戸大学を会場にした国際シンポジウムを計画しています。これは韓国海洋大学校、中国海洋大学など、これまで連携してきた東アジアの研究機関と協力・分担して毎年開催してきた国際交流集会の一環です。また2024年度、この国際交流集会は、韓国海洋大学校を会場にしてアジアで初めて開催される国際海事史協会大会と併催されることが決まっており、当センターとしてはこれを一つの目標として、研究活動を進めているところです。



神戸雰囲気学研究所 (KOIAS) の設立

久山 雄南

KOIAS

Kobe Institute for Atmospheric Studies
神戸雰囲気学研究所

2022年、文学部の若手教員有志が中心となって、神戸雰囲気学研究所 (KOIAS) を新たに設立しました (HP: <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/koiias/>)。現在の組織は人文学推進インスティテュート傘下におかれており、文学部のほか本学他部局 (工学部や国際コミュニケーションセンター) や他大学 (武庫川女子大、青山学院大、東京大、東北大など) のメンバーが、KOIAS を新学術領域「雰囲気学」の国際ハブ研究機関とすべく、さまざまな活動を展開しています。

神戸らしい気風であったり、部屋のムードであったり、時代の空気であったりと、雰囲気というのは誰もがよく知っているはずの何かです。日々の生活を思い出すだけで、その重要性は明らかでしょう。それにもかかわらず、雰囲気学というテーマを正面から取り上げた包括的な学術研究は従来ごく少数にとどまってきました。わずかな先行研究も、欧米の諸言語・諸文化を前提としているものが圧倒的に多く、また、理論と実践の架橋可能性も十分に検討されてはいません。こうした現状を打破するため、KOIAS では、東アジアあるいは日

本の視点をふくめた歴史文化の多様性を意識しつつ、実践知とも連携した「雰囲気学」の立ち上げに挑戦しています。

毎月、月例会ないしは講演会を開催して議論を深めているほか、島津製作所との共同事業も行っています。同時に国際研究ネットワーク構築も進めており、これまでにイタリア、ドイツ、カナダ、スロベニアの関係機関と学術協定を結びました (具体的事業として、イタリアやドイツからの研究者招聘、スロベニアでの国際シンポジウム共催など)。昨今の急速な社会のDXを考えても、あるいはAR/VRの急速な発展や全体主義的「空気」の気配を考えても、今後の世界的な学術動向において「雰囲気」はますます重要なキーワードになっていくと考えています。関心を持ってくださった皆さん、ぜひ公開講演会などにお越しください。

言葉の枠を超えて 日本語と中国語、文言文と現代語
—— 芥川賞作家、李琴峰さんに聞く

濱田 麻矢

2023年3月22日、神戸大学海港都市研究センターの主催で台湾出身の日本語作家李琴峰さんのトークイベントを開催しました。

LGBT文学の旗手として、また母国語ではない日本語を創作言語として選んだ書き手として注目されることが多い李琴峰



さんですが、中国の古典文 (= 漢文)、そして漢詩の作り手でもあります。台湾の地方都市で、独学で日本語学習を始めた李さんは、日本人が国語教育の一環として「中国古典文」を学び、それを日本語音で読み下しているという話に強い衝撃を受けたそうです。

当時中学生だった李さんは「中国語を母語とする私が、まず中国古典文を書き、それをまた自分で日本語で読み下せるようになったら……そうすれば東アジア最強の書き手になれるんじゃない?」と考えたそうです。

残念ながら、「日本語で読み下す」という最終目標には挫折してしまったそうですが……。

本イベントでは、本学部の早川太基講師が日本語話者の漢文漢詩作家代表として対談相手をつとめました。お二人はお互いの漢詩文を読んだことがあったそうで、一見如故 (初対面ながら旧知のごとし)、東アジア漢字文化圏で長くリンガフランクの役割を果たしてきた漢詩漢文を読み継ぐ喜び、今の時代に漢詩漢文を新たに創作することの楽しさと可能性について存分に意見を交換しました。対談の後、フロアのほうから日→中、中→日という李さんのマルチな翻訳活動について、翻訳と創作、散文とフィクションの関係について、また台湾と日本の出版事情について、多くの質問が寄せられました。最後は急ごしらえのサイン会となり、李さんには笑顔でサインと握手にに応じていただきました。



KOJSP の活動報告

大河内 瞳・林 由華

KOJSP では、現在 2022 年 10 月に渡航した 11 期生が在籍しています。その前の 10 期生は、コロナ禍の影響で最初はオンラインでの参加になり、渡航できたのは 2022 年 4 月でしたが、11 期生になりようやく以前のように開始時から神戸で学生を迎えることができました。2022 年 12 月には、KOJSP10 周年記念会が対面・オンラインのハイブリッドで開催され、在校生と修了生を中心とした交流が行われました。年度が変わり、11 期生にとって日本滞在の後半となる学期が始まりました。そして、今学期から、この一年間の集大成となる修了論文の作成が始まりました。2023 年 8 月には修了発表会もあります。また、グローバル・アクティブ・ラーニングの授業では、学内の日本人学生や別プログラムの留学生たちと一緒に広島に行き、広島平和記念資料館を見学したり、

広島在住の方々とディスカッションをしたりしました。並行して、12 期生の受け入れの準備も進んでいます。来期は 9 名の学生を受け入れる予定になっており、現在チューター決めなどを行っています。



MESSAGES

近 況

大阪府豊中市から往復 3 時間を掛け毎日京都まで通い続けた 4 年間の意味

藤田裕嗣

定年退職を迎え原稿執筆のご依頼があった。昨年度のご退職者は松田毅先生であり、当方自身が 1976 年度から 9 年間通い続けた京都大学文学部、大学院文学研究科の先輩だった。とは言え、在学当時は専攻も違い、全く存じ上げなかった。当時の京都大学文学部の 1 学年定員は、本学部の現状の 2 倍あった訳で、読者諸氏にはご理解いただけるでしょう。

先生のご出身が岡山市に対し、当方の場合、タイトルにも掲げた通り、豊中市であって、読者諸氏には大阪大学文学部が位置しているのも、ご承知いただけるだろう。当方自身、小学生以来、地元の阪大を目指していたが、高校 3 年間、担任だった数学教師に背中を押され、「一浪覚悟」で京都大学を受験して、現役合格できたのである。

本来の専門は歴史地理学ながら、中学 2 年生時点で将来は高校社会科（現状の「地理歴史科」では決していない！）教師を目指したが、高校 1 年で地学を教えて下さった地学教師が 3 年時に大阪教育大学地理学教室の助教授に栄転され、朝礼で挨拶されたのを当方は聞いて、自分自身も大学教員になりたい！と夢見て、チャレンジしたからこそ、実現できた。当方は兵庫県南部地震が起こった翌 1996 年秋に本学に着任して以来、高大連携についても力点を置き、上述の話題にも言及してきた。

京都時代の当方は大学院に進もうとして、実は一浪を強いられた。当方にとって「不合格」は初体験だったが、大

学院への現役合格は無理だろう、と最初から諦めていた。浪人した 1 年後に何とか合格でき、修士論文提出後、博士後期課程（いずれも当時の正式名）に進んだ。その辺りの苦労については、高大連携に関する授業でも何度か披露した訳で、ここで詳細は割愛します。

当方は、2016 年度後期から 3 年半、大学附属中等教育学校の校長を兼務し、その時期に神戸大学の先生方に呼び掛け、本校の 4 年生（6 年一貫教育なので、高校 1 年生）を対象とした「インターンシップ学習」が始まり、当方は地理学の特性を現地で理解して欲しく、案内し続けた。ここでは退職直前の昨年度に京都を案内した内容の一部をご紹介します。

人文学研究科の修了生が京都で研鑽を積んでいて、彼とは、当方自身が在学中、何度も利用した京都府立図書館で合流し、南禅寺を経て北に進み、哲学の道（疏水分線）を歩いた。当方が大学院合格後、やっと下宿を始めて以来、何度も訪れた「西田幾多郎石碑」を経て、最後は吉田神社を目指し、その途中で花折断層について説明した。特に説明板等はないのだが、実は、京都市内で最大級に危ない、と見做されている断層だ、と当方は、院生で初めて認知したのであり、その事情は、今のところ、全く変わっていない（要は、近世初めに大きな地震が起こって以来、特に再発していない）。

この、いわば「平和」が、あと何年続くだろうか？